The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ネルソン・ロドリゲス『結婚式』旦敬介訳、国書刊行会、2025年、468頁
Author(s)	宮入, 亮
Citation	Anais : Colóquio de Estudos Luso-Brasileiros. 2025, 51, p. 104-108
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/103350
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

ネルソン・ロドリゲス『結婚式』旦敬介訳、国書刊行会、2025 年、468 頁

激しい卑語の戯れと微かな愛の囁き

宮入 亮

1980 年にノルデスチ（ブラジル北東部）の民間伝承などの研究でも知られるマリオ・ソウト・マイオールは、人の眼を引かずにはいないタイトルの辞書を上梓している。そのタイトルは『卑語とその類語辞典』（*Dicionário do palavrão e termos afins*）で、ジルベルト・フレイレの序文が付いている。そこからは、『大邸宅と奴隷小屋』において家父長を頂く奴隷制社会の放縦で無節操な性生活の記述に多くの紙幅を割いているように、このノルデスチの著名な社会学者も少なからずこのテーマに関心を示していたことがうかがえる。卑語といった場合には、gíria の語が示すように広くスラングや罵りの言葉などが含まれるが、palavrão という語ではとりわけ性的な意味合いや「卑猥な」、「下品な」表現といった側面が強調される。それほど分厚くはない辞書を少し眺めるだけでもすぐに気づかされるのは、性的なニュアンスをもつ語彙の多くが植物や動物に関わる言葉だということであり、そうした言葉はある意味「自然な」感情や欲望に結びつくのだといえるのかもしれない。

20 世紀のブラジルにおいて、文学において行き過ぎた卑語の使用は検閲という取り締まりの対象となることもあったが、その使用がもつ意味をめぐっては一定の理解が示されてもいた。上記の辞書のフレイレの序文には、卑語は社会の性的なふるまいにおいて文化的に条件づけられているものを確かめるのに役立つという指摘があり、筆者による序では特定の場合に卑語は必要なものでありおくびや放屁のような生理現象と同じだというその社会学者の指摘が援用されている（Souto Maior 1990: 11, 14）。またその序においては、20 世紀のブラジルの舞台俳優として活躍し、『ゴドーを待ちながら』の上演中に亡くなったことでも知られるカシウダ・ベッケル（Cacilda Becker）が卑語は「芸術作品の一部を成すもので絶対的に擁護される」ものであり、

「それを断罪しようとするのは、偽善的でないとするならば、少なくとも無知な態度である」と、卑語の文化的な価値を高らかに主張していたことも紹介されている（Souto Maior 1990: 13-14）。

ネルソン・ロドリゲスの 1966 年の小説『結婚式』は、こうしたある意味でブラジルらしい卑語を通じたあけすけな感情や欲望の発露が見事に描かれている作品である。訳者が指摘しているように、卑語だけでなく、登場人物たちが交わす親密さを表わすための独特な言葉遣いもふんだんに作中に取り込まれているが、例えば酒癖の悪いカマリーニャ医師は酔えば執拗に女性の尻のことを話し「売女の息子」というよく使われる罵りの言葉まで発し、喫煙好きのモンセニョール神父にいたっては主人公のサビーノとのお互い隠し事をしながらも無遠慮な会話において「性行為とは、ションベンだ！」（ロドリゲス 2025: 84）と作中で繰り返しており、豊かな愛情表現と共に抑え込めない強烈な欲望も言葉を通じて表されているといえる。まるで、それこそが自然な欲望の発露であるといわんばかりに、物語では不倫、同性愛、近親相姦といった様々な性的な関係が裕福な実業家サビーノの末娘であるグロリーニャの結婚式前日から当日までにかけて描かれ、話は衝撃的な結末へむかっていく。

ロドリゲスの『結婚式』は彼の書いた二篇のみの長編小説のうちの一つで、訳者も記しているように彼の文学の総決算ともいえる作品となっている。ページ数は 400 を超えるが、読者はそれほど長い話とは感じないだろう。それは激しい愛憎劇が繰り広げられるノヴェーラを彷彿とさせるあやふやな情愛に満ちた背徳的な話の面白さに加えて、作品の大部分が演劇さながらの登場人物によるリズムあるテンポのよい会話によって構成されているからである。これはやはりロドリゲスが演劇においてキャリアを積んできたことを如実に伝える特徴だといえるところで、それがスキャンダラスなテーマだけでなく登場人物の激しくも繊細な台詞にも趣向が凝らされている所以であろう。

全 28 章から成るこの小説は、サビーノの末娘グロリーニャがテオフィロという男性との結婚式の前日から当日までの一部始終が主要な登場人物たちの回想を挟む形で進んでいく。物語の始めに、末娘にただならぬ情愛を抱く父のサビーノは、知り合いのカマリーニャ医師からテオフィロがホモセクシュアルであると知らされる。それは医師が診察室で彼の助手のゼ・オノリオとテオフィロがキスしているのを目撃したからである。

サビーノやカマリーニャはやたらとホモセクシュアルを毛嫌いするが、それは彼らが「正常」と考える社会を脅かす価値観であるということだけでなく、その二人の中年の男がグロリーニャへ特別に気をかけているというところにも理由がある。おそらくは婚約者がホモセクシュアルでは彼女が幸せにはなれない、断じて許せないという思いがそこにはあるのだが、実はそこに彼らの欺瞞がある。サビーノもカマリーニャもグロリーニャを大事にしているつもりだが、それは彼らが認めている価値観に彼女を押し込めているということでもあるからだ。それゆえにテオフィロの大胆不敵な態度は彼らの欺瞞をよく浮かび上がらせているといえる。さらにいえば、物語の中盤では、実際のところグロリーニャも社会の秩序を支えていると自負しているような実業家と医師の二人が思っているほど貞淑でも従順でもないことが衝撃的な場面において明らかにされている。

とりわけサビーノは女性というのはかくあるべきという自分の考えを押しつけることによって彼に関わりのある女性を屈服させたり従わせたりしようとするが、作中で起こっていくことは悉くその不動産会社を営む成功者の意図に反している。グロリーニャだけでなく、妻のエウドクシアに対してもサビーノは文学の好みをめぐった口論を吹っ掛けたり、共寝において言葉を発することを禁じたり、さらには女性の言葉遣いについてもこだわりを見せる。こうした彼の態度は会社の秘書であるノエミアとの不倫によってひどく自分本位であることが強調される。妻や娘、さらには不倫相手にも女性としての貞淑を強い、女性の身持ちの悪さを批判しながら、自分は当然の権利と言わんばかりに暴言を吐き不倫をし、さらにはもはや罪としか言いようのない非道も働いている。しかし、サビーノの思惑に反して、エウドクシアは彼への恭順は示さず、対照的に完全な恭順を示そうとするノエミアですらも自らの思いを抑えきれず、それがサビーノの最終的な決断につながっていく。

サビーノに代表される欺瞞に満ちた保守的な価値観が抑えきれず噴出してくる欲望や思いは、登場人物たちの織り成す様々な関係によっても示されている。作中で最も過激な場面を通じて示されるグロリーニャとカマリーニャ医師の息子であるアントニオ・カルロスとの秘密の関係、ノエミアとハンセン病を患った妻を世話するシャビエルとの不倫関係、ゼ・オノリオの父への復讐心は、いずれも秩序を守っているつもりでいる偽善的な上流階級の足元をひどく揺さぶっているようである。また、所々で差し挟まれているブラジル文学に関する談議も

そうした構図に対応している。エウドクシアやグロリーニャは 20 世紀前半に起こったモデルニズモの詩人であるカルロス・ドゥルモン・ジ・アンドラージ、マヌエル・バンデイラ、ヴィニシウス・ジ・モライスらを讃える一方で、サビーノは彼らを好まずモデルニズモにおいて批判された高踏派の詩人オラーヴォ・ビラッキの名を挙げて自らを過去の崇拝者と主張し、彼と親しいモンセニョール神父も近代主義の詩人たちを徹底的に貶している。サビーノだけでなく、モンセニョール神父もかなり偽善的な人物である。彼は煙草をやめなければと思いつつその欲求は抑えられず、その密かな性的な欲望も言葉のうえに滲み出している。

様々に性的な関係が語られ卑語の戯れといった雰囲気のある作品だが、同時にそこには愛の囁きも聞こえてくる。それは立場を問わず、サビーノからも、グロリーニャからも、ノエミアやアントニオ・カルロスからも聞こえてくるが、いずれの場合も思っている人を引き留めることはなく結局は虚しく響くだけである。終盤の海辺でのサビーノとグロリーニャのやり取りの場面で、彼によって海の風景が「精液の匂い」、「洗っていない性器の匂い」がするなどと描写される箇所がある。海辺に二人きりという典型的でロマンティックなシチュエーションでありながら、その風景はサビーノには性的で退廃的なものにしか感じられなくなってしまっており、その不吉な雰囲気のなかで囁かれる愛には不気味さが漂う。何かを後ろ手に隠した家族愛から這い出してくるようなその求愛へのグロリーニャからの回答は、物語を結末へと一気に近づける印象的な箇所でもある。

ロドリゲスの『結婚式』においては、どの人物についても表と裏が極端に乖離する。「こうあるべき」と「実際はこうである」という対比はあけすけに示されていくが、そうしたことが起こるのが何よりも形式を重視して執り行われるはずの結婚式に際してであるというのが何とも皮肉である。あるいは、結婚を機にこれまでの家庭での生活が終わりを告げ、別の生活が始まるということを考えると、それまでのことを清算しておきたいという気が起こるのも自然なことなのかもしれない。この小説において、その清算は穏やかに話し合われるものではない。赤裸々な激しい卑語の戯れとどこか虚しい愛の囁きによって行なわれるのである。

参考文献

フレイレ、ジルベルト（2005）『大邸宅と奴隷小屋』鈴木茂訳、日本経済評論社。
Souto Maior, Mário (1990) *Dicionário do palavrão e termos afins*, 5ª edição, Rio de Janeiro, Record.